

「季刊わたぼうし」 第26号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:1992年(平成4年)3月1日 '92 春号

第26号のテーマ 「障害者と結婚生活 I」

いましめ
いや遠く
さまよい出でんとするか
見よ、善きンとは
まことに近きにある
幸福をとらえる
術を知れ
幸福は
常に手近にあれば

ゲーテ作 高橋 健二訳

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

テーマ《障害者の結婚生活Ⅰ》

今回は障害を持ちながらも、結婚生活をなさっている方々の体験談を寄せていただきました。

私たちの結婚生活

地域住民・会社員

私たち波瀾万丈の結婚生活も早、今年で31年の歳月が経ちました。県の更生指導所で知り合い、4年後に結婚し、翌年に子供が生まれました。

最初は私の両親弟妹と共に暮らしていましたが、やはり障害者夫婦として、肉体的、精神的にかなりの重圧で、これでは子供のために良い結果が得られないと考え、6年後に周囲の反対を押し切り別居しました。それ故、子供と3人どん底の生活が続きました。

子供がよく「うち貧乏、うち貧乏」と言っては、自分で自分を慰め何事も我慢していました。毎日、毎日、一生懸命生きてきたので、私は子供の成長過程において、記憶の空白ができてしまいました。それでも自分たちは不孝だと思ったことは一度もありません。

また、ある人から言われたことですが、毎日を泣いたり、怒ったりして過ごすのも一日なら、明るく過ごすのも一日、どうせ過ごすならば、何もなくても、家族仲良く手をつないで、笑って過ごせば必ず良いことがある、と聞かされました。

私共は、何事もやってもやれないことはない、やらずにできることがないと、自分で自分を励まして、いろいろなことをやりました。家庭電気製品の修理を筆頭に、名刺の印刷や新聞・牛乳の配達等、他人の方に迷惑をかけたことも数知れずありましたが、それなりに頑張りました。

私の障害は2級の脳性小児麻痺で、家内は左手足の障害です。でも、二人とも勝ち気な性格なので、人手を借りることが嫌いで、できる限りにおいて自分たちで片付けてきました。

お陰で、子供は親を障害者と認めていないのか、そのような扱いは一切してくれませんが、また、私共は障害者だから子供の幸せを考えたとき、負担にならないように大学から県外に出し、現在も離れて暮らしています。

他人の目から見て変わり者だと言われますが、自分のことは自分で解決して行きたいのです。そばに子供がいれば、どうしても頼ります。それと私共は生活苦から子供を一人しか作れなかったのですが、このことが何より残念です。本当に「後悔先に立たず」とは、私たちのことでしょうか。とにかく、私たち夫婦は前向きに喜怒哀楽を共にし、健康で朗らかに暮らしたいと思います。

障害者の結婚生活

地域住民・主婦

障害者、健常者を問わず結婚はいわば、他人同士の同居生活です。今まで20～30数年違う環境で育ち、考え方も違う二人が一緒に生活を共にしていくわけですから、双方に歩み寄る姿勢がないと無理がきます。

また、経済的にはそれぞれ自立するだけの蓄えがあること、そして、自分の身の回りの

ことは自分でしていくように、心がけることが大事だと思います。自分の主張ばかり通したり、わがままを言ったり、相手に求めるばかりではうまくいかないようです。お互いのできるだけの協力をし、助け合い、支え合っていくのが理想的だと思います。

子供ができれば、子育ては大変な仕事ですが、大変なのは長い人生の中でほんの数年です。子供は日々成長していくものです。昨日より今日、今日より明日と成長を重ねて、いつの間にか親の手を離れて自立していくものです。

ときには苦労を吹き飛ばすほどの何事にも替えられない喜びもあります。子供の成長を見守ることは、親にとって本当にうれしく楽しみです。考えてみれば、親としての年齢は子の年齢と同じわけですから、子と一緒に育っていくもの、また、育てられていくものなのでしょう。

自分の体験からとりとめのないことを書きましたが、これから結婚される方は夢があっていいですね。どうぞ理解し合い、助け合って暖かい家庭を築いていただきたいと思います。

障害者の結婚生活

地域住民・会社員

我が実家を離れて早人生の半分以上。社会人となって10年目にして同じ下肢障害で知り合った妻と結婚しました。世間並みに親はあれこれ縁談を考えてくれていたようでありましたが、お見合いの経験もないままに恋愛結婚となりました。双方の両親ともに多分、健常者の相手を望んでいたであろうと思われませんが、期待に反して障害者同士が結ばれたわけです。当人の納得より両親を説得することに力を注いで2年半程の交際の末に結婚しました。障害者の仲間で健常者を相手に望むことは極めて自然なことであり、場合によってはその方がより人間的な気もするのですが、別に現状に不満を言うわけではありません。

子育てについては、周囲の人々の暖かい励ましにより、男女二人に恵まれ長男は来春はもう中学生になります。我々夫婦では思いもつかない悩みも今後出てくるかもしれませんが、普通の社会人として当たり前の試練であれば何とか乗り越えたい。家族は二人からです。一度の人生なら、結婚は2倍楽しい。

障害者と結婚

地域住民・主婦

私が結婚して、早くも12年の月日が経ちました。結婚して、毎日の生活、育児にと追いかけられるように時間が行き過ぎました。

最近では「お嫁さんを探してほしい」と友人から声かけられることが多くなりました。

障害者の結婚は非常に難しいと思いますが、実際のところは健常者と変わらないのではないのでしょうか。障害度を意識し過ぎではないのでしょうか。「自分はこれができないから、それができる人」とか「相手にこれをやって欲しい」とか、ということではないような気がします。結婚そのものは、また、障害者の自立にしても本人、またはその相手の問題で

す。

確かに人間は誰でも一人で生きているものではなく、また生きていけるものではありません。各人の障害の度合いが違っていても、家族、友人、第三者の協力は必要であり、重要です。でも、本人の努力が第一であり、自分のできることを精一杯に活用し、結婚できれば、お互いの勇気と知恵を出し合い、仲良く思いやりとをもって歩んでこそ、明るく楽しい生活につながるのではないのでしょうか？ どうしてもできないことは、家族や友人、近所の人たちにこちらからお願いするという形が望ましいと思います。

12年間を振り返っていろいろなことを体験してみて、「こんなはずではなかった」にぶつかったこともあります。でも、これを乗り越えてみると、今ではそのできごとの一つ一つが反動となり、バネとなり、踏み台になっているように思います。

障害者の結婚生活

地域住民・主婦

あれは結婚して間もない頃のことでした。カレーライスを作ろうと思い、ニンジン、タマネギの皮をむいて、適当な大きさに切った。

ジャガイモは皮むき機がなかったので、包丁でむいた。でこぼこしているうえに、手がすべったりするので、ジャガイモ何度、流し台の上を転がったことか、そうしているうちに、何とか皮がむけた。ホッと一息ついて時計を見ると、ジャガイモの皮を一つむくのにだいぶ時間がかかってしまっている。これでは間に合わない。たしか、だいぶ余裕を見て始めたのに一、と思いながら、急いでバターでいためて水を入れた。さっきの疲れを忘れさせられる程、気持ちはあせった。

私は、ずーっと小さい頃から学園にいたので、家庭科で料理を習っても、その日のうちに家に帰れるわけでなく、帰れるとしても一ヶ月ぐらいで、いつも習ったことを生かされずに終わってしまっていた。料理の味はまあまあなのだが、切ることはすごく苦手だ。やはり、学園生活だったので、料理するチャンスも限られてくると思う。

結婚してできるようになったのは、自分が作らなければ誰も作ってくれない。頼れる人はいない、と思う気持ちがあったからだと思う。あれから5年、この話も笑い話になっている。

障害者の結婚生活

地域住民・主婦

障害者にとって結婚生活をするということは、あこがれでもあるし、不安に思うところだと思います。でも、今は結婚してよかったと思います。一人でできなかったことがあっても、二人なら何とかできることがたくさんあります。

子供が産まれたときも、どれだけ主人やお母さんに助けていただいたかわかりません。私の場合は共働きをしているので、お母さんの助けが、どれだけありがたいものか知りません。

ですから、仕事にも張り合いが持てます。仕事でいやなことがあって、やめたいと思ったことが何度もありましたが、子どもたちの顔を見ると、また、頑張ろうと思います。温かい家族というのは、皆が相手を思いやって、協力して、言葉を交わすことで成り立つものだと思います。それは簡単なようで難しいことです。私は障害者も、もっともっと社会に出て、いろいろな方に出会ってお付き合いをして欲しいと思っています。

そして、できることなら、障害者と健常者が結婚できたなら、こんな素敵なことはないと思います。というのは、私の知人で3組の方を見てそう思います。本当に協力し合って、いつも「素敵だな」って思っています。そして、そんなカップルが何組でもできればよいな、と思っています。

また、ある知人、私もそうですが、障害者同士のカップルも、本当に相手のことを思いやっって、お互いにできることはして、協力して生活をしています。

ですから、障害者の方も恐れずに、自分にとって一生のパートナーが現れたのなら、結婚して欲しいと思います。決してマイナスになることはないと思います。

結婚をして

地域住民・主婦

自己紹介します。主人は胸椎損傷で車いす、私は筋萎縮症で電動車いす。早いもので結婚して3年目になります。

結婚して、よく聞かれることは「ご主人の仕事は?」でした。「あア、旦那さんとなる人は、やはり仕事をしていなければいけないのか」、車いすの障害者といっても障害の程度はさまざまです。

車いすの障害者が職に就くことがどんなに困難な社会か、仕事をしたくてもできない状況を知って欲しいと思いながら、答えを生活の中で見つけました。ユーモアを込めて「主夫(婦)をしています」と答えるようになりました。

力のない私は冷蔵庫から野菜を取り出すことも困難で「お前は頭脳労働、俺は肉体労働や」と言いながら、床ずれ治療に欠かせない、15分間毎5分間の除圧、この動作を繰り返す15分の間に2人で家事をします。

初めて同然の料理も母の妹が私の味付けの頼り、母が作ったおかずを思い出しての献立。ジャガイモは放っておくと、芽が出てくることを知り、田舎からもらう野菜をせっせと世話していた母を思い出すなど、親の姿に温もりを感じている今日この頃です。

毎日、通院を必要とする主人との生活を整える日常生活は単調ですが、地域ケアの人びと、友人の応援によって、この町で越冬しています。

初めまして、私は通称アパッチで通っています。今回の文章はパソコン通信で知り合った？ まだ、知り合ってから間もないぜんちゃんから頼まれましたが、何を書いたらよいのやら困ってしまいました。

簡単に生い立ちから書きますね。私は1952年11月11日生まれの脳性小児麻痺です。学校は普通学校と養護学校の経験があります。私は24才の時に家を出て、一人でアパートを借りて生活をしました。その中で私は恋愛も、何回かしました。片思いも多かったけれど、その中の一つが、今から10～11年前に実って今まで来ています。

彼のあだ名は「トジ竹」といいます。彼はあわて者というか、ドジばかりするので私の友だちがこのあだ名をつけました。

彼は片耳が聞こえませんが、健常者として育ってきたので、私みたいに障害者という意識はないのです。私と彼は、障害者解放運動の中で出会い、もちろん私がアタックしました。そして、相手が本気かそうでないかは、親との関係とか、子供ができたときにわかるということを知っていたのです。

「子供を産み育てることは、お前にはできない」と親たちから言われ続けてきたので、子供を産み育てて行きたいと考えていました。彼も了解してくれ、妊娠して両方の親たちに、話しました。

私の親は反対はしませんでした。それは、やはり、障害者の子供をもらってくれるという人があれば、ありがたいことだという考えがあったからだと思います。

それに比べて、彼の方の親は猛反対でした。「何も障害者と結婚しなくても。死に水も取ってもらえない」等と言われたそうです。

私の家は普通の家と反対みたいになっています。ご飯の用意、子育ては、「トジ竹」の仕事になっています。家計のやりくりと、子供の宿題を見るのと衣類の整理が私の仕事になっています。

11年間の間にけんかをしながら、お互いに得意な面を生かしながら、役割を決め生活するようになってきたのだと思います。

いろいろな場面で、私と彼、障害者と健常者との違いで、けんかになりましたが、一番よく出たのが、子供が小さかった時だと思います。抱っこ一つにしても、うまくできる者とできない者の溝というかありましたが、大きくなるにつれて、そんなこともなくなりました。

まだまだいろいろなことがありましたが、これからも、何かある度にお互いに相手がいって良かったと思えるような関係で、いつまでも過ごして行けたらと思うこの頃です。

福祉もの知り博士 官公庁舎について

皆さん、いよいよ春がやってきましたね。今回は「官公庁舎の設備について」講義をする。近年、郵便局や公共職業安定所等の庁舎については、障害者の利便を考慮した庁舎設備の改善が各所で進められている。玄関ドアの自動化、スロープの設置、障害者用トイレ、手すり、インターホン等の設置である。これらは、建設省の指導による「官庁営繕における身体障害者の利用を考慮した設計指針」(昭和58年)によりいっそう促進されている。

官公庁舎の使いやすさということに関しては、単なる構造設備のみならず、情報サービスの改善が不可欠であるが、この点に関しては、例えば、郵便局における視覚障害者サービスとして、視覚障害者対応の現金自動支払機及び現金自動預払機の設置(機械操作の音声誘導、イヤホンによる残高確認等)、郵便貯金の点字による内容通知の取り扱い等が新たな試みとして行われてきている。

国の庁舎のみならず、地方公共団体においても、福祉事務所をはじめ住民の密接な関連のある各種公共建設物の改善が進められてきている。

今回は、私たちの日常生活に関連した建設物について解説したが、いかがでしたか?来年度は、もっと生活に密接なテーマで解説を行う。

(参考文献・介護福祉士養成講座「障害者福祉論」・中央法規出版)

我が家のペット大集合 ～元気ちゃん登場～

地域住民・会社員

私の飼っているインコは「元気」といいますが、みんなは「ゲンちゃん」といいます。甘やかして育てたので、とても生意気な「ゲン」なのです。

カゴに入るのは夜、寝るときだけ、あとは一日中、部屋の中を走り回っています。ときどき、踏まれそうになっているけど、こりずに走り回っています。

話を聞くことが好きで、いつも口元に来ては、自分で「ゲンちゃん」といっています。こんな生意気な「ゲン」ですが、家族みんなでかわいがって育てています。

みんなのひろば

私のボランティア活動

地域住民・会社員

私のボランティア活動は、一昨年の夏ある障害者のキャンプに参加したのがキッカケです。テレビでボランティアを募集しているのを聞いて、場所も近かったので、ごく軽い気持ちで参加したのですが、実際にやってみて「大変だな～」という気持ちと、それ以上に障害者の方が喜んだ顔がとても印象的でした。

私はよく感じるのですが、障害者の方の一生懸命さというものを見習わなければならぬと思うのです。キャンプのときもそうでしたが、私たちがごく当たり前のこととして、ものを見、話、歩くといったことのできない人がいるという現実と、それでも明るく、海に入ったとき、動かない体全体で一生懸命喜びを表現しようとしている姿がとても素晴らしく忘れられません。

実は、あるコンサートの帰りに夕食を食べに入ったラーメン屋さんで、私たちの横に子供連れの家族がやってきたのです。たぶん、小学2～3年位だと思いますが、その兄妹がじっとこちらを見るのです。大変失礼な言い方ですが、その兄妹にとって、とても珍しいものを見ているといった感じなんですね。

そのときに思ったのは、障害者の方がまず自立するためには、きっと自分の存在をアピールする必要があります。そして、それに対し、特別のことではなく、ごく自然に受けとめることのできる心を育てなければならぬのではないかと思います。そのためには、小さいときからそういった人たちと接することが必要なのではないのでしょうか。

障害者の生活環境

地域住民・会社員

私は「健常」者なので、「障害」者の視点には気付かぬことが多いものだと思えます。

私は病院の職員ですが、車いす生活の患者さんも多いので、健常者の視点で行われている街づくりの不自然さを感じることが少なくありません。

しかし、実際には私は当事者でないので、気付かぬことがあって当然だろうと思うのです。当事者でなければわからないこと。これは病気や事故によって、気付かぬことがあって当然だろうと思います。

身体が状況が変化の方が痛感されるだろうと思います。身体の変化が生活環境まで変化させてしまい、いわゆるハンディキャップ(社会的不利)を生み出してしまうのが現在の構造ですね。

この問題は街作りに「有識」者だけでなく、「障害」者が参画することによって改善されていくはずだと思います。街はこの世にあるものすべてのためにあるはずですから(ヒトのためだけでなく)。そんな街作りが進んで行けば、「障害」を持った人たちと街で出会うことが多くなり、ハンディキャップの軽減に役立つのでは、と私は楽観的に思います。問題の根本にあるのは、「障害者」に対する無知、そして差別や偏見ですから。

新潟で障害者が餓死＝

地域住民・肢体障害

昨年8月20日に、新潟の障害者に呼ばれて新潟県庁に行きました。県の障害福祉課との話し合いでしたが、上越市で母親が病死して亡くなってから、息子が餓死した事件が新聞に載っていたことです。障害が重くて自分では食事もできなかつたらしいですが、もう一件は、三条市で障害者を道連れに無理心中しようとした親子がいて、親だけが生き残った事件がありました。

最近になって、富山・兵庫・横浜などで、障害者殺しや無理心中が増えてきています。国際障害者年10年目を迎えるに当たり、日本がこれほど世界一豊かな国だといわれるのに、なぜ、このようなことが増えているのであろうか。これは障害者に限らず、老人の自殺も増えてきていることに関係しているのではないだろうか。

国や県は一億総ボランティアとか、ホームヘルパーの倍増などを掲げていますが、その実態はいかなるものであろうか。

新潟県の障害福祉課の対応は、親が面倒を見て当然、それができなければ施設へ入りなさい、という考えである。しかし、その障害者たちがなぜ、餓死にいたったのか、なぜ、無理心中にいたったのかを、はっきりさせなければならないということで、午後2時から7時まで話し合った。

豊かな日本がなぜなのであるかについては、日本の福祉に対する発想の違いや価値観の違いであると思いました。他国のことを知ることによって見えてきたものは、やはり根本的な違いが根底にあること。それは、親の扶養義務、その子のことはすべて親の責任という考え方にあり、老人問題でも家族の責任で片づけられてきていることに問題がある。

若いときには、年をとったときのことや交通事故や労災・病気で障害者になることは考えないであろうが、健常者がそうなったときのショックは計り知れないほど大きいみたいだ。しかし、そうした人たちのことも運が悪かったことだけだとして、片づけてしまうケースが多いように思う。

この話し合いで見えてきたもう一つのもは、ホームヘルパーの身分や待遇保証がなされていないことである。このことは、日本の社会における老人や障害者に接する人たちも含めて問題が多いに含まれているように思う。

東京都は独自に介護保証をしています。ほかの地方都市との格差が、ますます制度や福祉サービスそのものに見られるようになってきました。

病院生活のある日の日記から「幸せと不孝」

地域住民

毎日、毎日、考えるのは、これらうその世界だ。私は夢を見ているのにちがいない、って逃げてばかりいる。でも、現実が現実。逃げられない事実なんだ。何げないテレビのCM一つ見たって、食事に出されたものの味にしたって、人々の話を聞いていたって、ああ、これは現実なんだ、夢じゃないんだって思わされることばかり。

でも、少しずつ、少しずつ、よくなっているのも確か。それは私を取り巻くすべての人

びとのおかげ、とくに実家の母と主人「ひろ」のおかげ。その他にも一杯、一杯、数え切れないほどいるの。

主人の「ひろ」っていうのは、浩満さんとお付き合いを始めた今から8年ほど前からの愛称。「ひろ」「かこ」ってお互い呼び会ってきた。この頃「ひろ」は「香代子」って呼ぶから寂しいけれど。でも、今は大部屋だし、周りに人も多いからだって。辛くて苦しくて悲しいことばかり。「ひろ」と会っている時間だけが、唯一の幸せなとき。

彼は、小学校の教師なんだけど(実は私も一応小学校の教師)仕事が終わると、いつもいつも病院に寄ってくれて8時頃までいてくれる。

二人の間には2才3ヶ月の娘、歩美がいる。県立病院にいた頃は、毎日夫の両親が連れてきていてくれたけど、ここの病院の方針で「面会者が多いときは、2～3階のロビーで会うように」と言われてからは、1日おきになってしまった。でも、毎日では夫の父母にも負担をかけたし、これでよかったと思っている。ただ、わが子が病気で苦しんでいるときさえ、そばにいてやれないことが辛い。

事故前後の記憶がまるで途絶えているものだから、始末が悪い。事故のときの記憶さえあれば「夢だ、夢だ」って、逃げなくてよかったのに。でも、どうしようもなく辛いときは、心の逃げ場になっている。リハビリでは心が辛いと思ったことはない。むしろ、お休みの日の方ががっかりする。

事故に会うまでは、幸せってどんなものなのかわかっていなかった。幸せと不孝は紙一重。表と裏なんだってよくわかった。以前はどんなに幸せだったか。今になってよくわかる。今だって考えようによっては幸せだといえるし、みんなだってそう言う。

夫とか主人って書くべきなんだろうけど、どうしても心がこもっていないような気がして、「ひろ」の深い愛情を感じる。私はこの人と結婚できてよかったと、つくづくそう思う。それに両家の家族や親戚の人びと、一杯の友だちの暖かい応援、励まし、思いやりを感じる。それに多くの人びとの暖かい援助も感じる。私は幸せなのかもしれない。私は私を取り巻く多くの人たちのためにも、自分のためにも、絶対によくになりたいし、だれが何と云おうと、絶対によくしてみせる。

初めてののお便り

病院・言語訓練士

皆さん、始めまして。不特定多数の皆さんへのお便りなので、自己紹介と人々紹介をします。

金沢にある兼六園のとなりに、新しく増改築したばかりの国立病院があります。私は毎週一回、言語のリハビリのお手伝いをさせてもらっています。

先日は集団で茶話会を持ちました。鬼の面あてや風船バレー、福笑いに福引き、そして発声体操や歌などで楽しい半日を過ごしました。

右麻痺の手でバランスをとりながらのナイスピッチングのNさんとIさん。超美人ができた福笑いのUさんとSさん。車いすで興奮していた風船バレーのFさんとMさん。歌詞が出たり、出なかったりのTさん。お互いに相手の様子を眺め、また、笑い合うSさんなど

のご家族の方々共に元気印を与え会いました。この力でまた頑張ります。

ところで、戦後、東京から名古屋までゾウ列車が走ったそうです。ゾウを見たい子どもたちの夢を乗せて。

皆の希望と願を乗せて。今年の「ひまわり号」が安全で快適な旅と土地を創っていく機関車になりますよう応援しています。

生まれてよかった

地域住民・高校生

「死んでしまえばいい。父さんも母さんも」父と母の背中に向かって、何度こんな言葉をはいてきたことだろう。

私の両親はろうあ者です。父は2才で病気のため音が聞こえなくなり、母は戦争のために音を失ってしまったそうです。二人はお見合いによって知り合い、結婚をして、私が誕生したのです。

しかし、ろうあ者の両親の中で私の言語行動は極端に遅れ、小学校に入ってからもつかかりながらしゃべる片言を笑われ、そのために私は口数も少なく、人前に立つことをさけていくようになりました。私は友だちもできずに孤立していく自分をどうすることもできませんでした。楽しそうに会話している友だちを横目に、「何故、私だけがうまく話せないの」と自分の環境をうらみ、両親を責めていくしまつでした。

そんな時です。更に私の心を踏みにじるできごとが起こったのです。あれは小学校のPTAの日のことでした。授業参観でのことです。母は通訳者の人をともなって私の教室に現れました。そして、二人はすぐに授業の一斉を手話で語り始めたのです。静まりかえった教室の中で、その手の動きはとても奇妙な感じに人々の目に写ったようでした。その時です。一人の男の子が耳と口を押さえて、私を見て、「つんぼの子」と言ったのです。小さい声でしたけど、私にはどんな言葉より鋭く心を突き刺し、傷つけられました。「なんでお母さん学校に来たの。一人で来てよ。聞こえなくたって、だまって立っていりゃいいじゃない」と学校から帰るなり、聞こえるはずのない母に、大声で叫んだことを今でもはっきり覚えています。

私は両親さえ心を閉ざし、用がある時は、ただ紙に書いてすませるようになっていました。担任の先生は心配され、「手話を習ってみたら」と言って下さいましたが、それもせずに、両親への不満をつのらせていくばかりでした。そして、ボリュームをいっぱいあげて音楽を聴いたり、大声で両親の悪口を叫んだり、「どうせ聞こえないんだから」と私はやりたい放題でした。

しかし、そんな私に考え直させるチャンスをくれたのは、高校入試を目前とした時の母の言葉でした。身ぶり、手ぶり、そして、鉛筆でゆっくりと、「自分たちは耳が不自由なために、人様からずいぶん助けてもらっている。ゆかりはせめて、その代わりをして世の中の役に立つことをして恩返しをしておくれ」と言うのです。母は整えられている今日の福祉施設のことや、親切なボランティアの人たちのこと、そして、町中で出会ったある女子高校生のやさしさや、ホームで電車を待っているときの駅員さんのいたわりなど、くわ

しく話してくれたのです。

両親にとって音のない生活50余年、車とバイクの音の違いも知らず、犬や猫の鳴き声も聴いたことがありません。親や兄妹の声はもちろんのこと、子供である私の声さえも知らないのです。両親の音のない世界は、いわばテレビの音を消した状態と同じなのです。人をうらみ、戦争をにくみ、世の中に怒りを抱いているとばかり思っていましたので、母の言葉に自分の耳を疑いました。しかし、母は「ありがたい、ありがたい」と繰り返すばかりです。私は自分の愚かさを恥じました。母の言葉に目がさめ、人間としての心の持ち方を考えるようになりました。

今、私は高校3年生、看護婦の道を志しています。「何かお役に立つ仕事を」と言う母の教えを守り、この道を選んだのです。そして、最近、ようやく手話を習い始めました。手話は両親にとって大切な伝達手段です。言葉と同じです。手話を初めてから両親の耳の不自由なつらさや、もどかしさが少しずつ分かってきています。そして、素直な気持ちで話し合えるようにもなりました。私はやがて、病院で働き、医学的専門用語の手話を覚え、正確でわかりやすく伝える通訳ができたらと、考えています。父と母の代わりに私は精一杯、働く覚悟ができました。

今、私は生まれて初めてこのような多くの人たちの前に立っています。父と母のことを話すのも初めてです。昨夜は両親の前でこの弁論のすべてを手話で話しました。

「父さん、母さん、私を生んでくれてありがとう」という思いを込めて。

ニューヨークに行つて2

地域住民・肢体障害

19日の朝、朝食をホテルのレストランで食べ、私と田中さんと山中さんと一緒にニューヨーク・マンハッタンを歩いてみようということ出てかけた。48ストリート・レキシントンアベニュー(ホテルの場所)からマジソン街、五番街へ歩いた。個性的な建物が多いビル街、それを眺めながら歩くと首がいたくなるほど高く、また、興味を誘う独走的な建物ばかりであった。

また、歩いているといろいろな人種の人にすれ違う。こんなことが当たり前の国かと気づかされるが、私もここでは外国人なんだけれども、そんな気持ちにならなかった。これは、私だけなのであろうか。

そうして歩いているうちに、あの有名なエンパイア・ステート・ビルに来ていた。山中さんにあの有名な「キング・コング」の映画にでて来る建物だと言われて、入ってみることにした。エンパイア・ステート・ビルの102階に上がって展望することにした。日本の観光客が大勢いたが、なんとといっても、展望台まで上がったのにぐるっと回って展望しようとしたら、階段があって「これが障害者法の通ったアメリカの建物なのか」と思った。

忘れていたが、エンパイア・ステート・ビルの前に車いすの障害者が一人でいたのを思い出した。何をしていたのかわからないが、ホテルに帰る途中にも一人で車いすを動かしている障害者の人を見た。私たちが歩いていると結構歩道のスロープが付いていたり付い

ていなかったりで点字のブロックが引いてないのに気づくがこれはどういうことなのだろうか。

私は午後2時からデニス・マックウェドさんと会う約束にしていたので、昼食を途中で取って帰ることにした。デニス・マックウェドさんと会えるように連絡を取っていたのは、現在、富山に住んでおられるが、元国連に勤められていた矢野さんをお願いして実現した。2時過ぎてもデニス・マックウェドさんが現れない。また、通訳を頼んでいた高橋さんもこられないのでどうしようかと思っていると、しばらくして高橋さんがこられた。(高橋さんは矢野さんの知り合いの方でアメリカに5年間住んでおられるとのことだ。)また、矢野さんの妹さんもアメリカに住んでおられ、いろいろと連絡をとっていた。大変ありがたく思っている。 ～次号に続く～

編集局より

この「ニューヨークに行つて」は、全編が16編の構成となっております。すべてを紹介できませんので、全編を読みたい方は事務局にお問い合わせ下さい。

本の紹介

これ、本番ですか。

秋山 豊寛著 発行所：CBS・ソニー出版定価：750円(税込み)

1990年12月2日、午前11時13分32秒、秋山さんは旧ソ連のカザフ共和国にあるバイコヌール宇宙基地から宇宙に飛び立った。地球に帰ってきたのは12月10日15時08分16秒、旧ソ連のカザフ共和国アルカリクの北東の平原であった。

この本には宇宙船が飛び立った直後から着陸まで、TBSラジオで秋山さんが地球のスタッフと交信したそのままの言葉が記されている。

「これ、本番ですか」は秋山さんの第一声。宇宙飛行士の「地球は青かった」という名セリフもあるだけに、地球の人々は待ちかまえていた。その第一声が「これ、本番ですか」。

(「われら人間」より転載)

編集後記

大変、暖かい日が続く毎日、皆さんいかがお過ごしでしょうか。春がすぐそこまで来ているようで、早く本当に暖かくなるといいですね。

さて、第26号ですが「障害者の結婚生活」をテーマに原稿をお寄せいただきました。

いつも皆さんの現状等を読ませてもらい、感動しているのですが、健常である私は今回の内容につきまして、特に障害のある人たちがお互いに手を取り合い、また、家族や周囲の人たちの協力等で頑張っておられる姿を想像して、涙ぐんでしまいました。

障害を持つ人たちがより生活しやすい、明るい社会が一日も早く来るように頑張りたいものです。

最後に、発行日より遅れての送付になるかもしれません。ご了承下さい。(S.K)

27号のテーマは障害者の結婚生活Ⅱ